

中
勘
助

胆
石



胆

石

昭和十五年十月四日

姉の病気のため五月末から外へ出ず、もう大丈夫とな
ってからもやはり気がかりなので余儀ない用事の場合月
に二、三度、それも見舞の人に留守を頼んで出たついで
に日にあたつてくるぐらいが関の山だった。しかし近頃
では姉もよほどよくなつたし、これからすこし散歩をし
ようと思つてるうちに今度は自分が病気になつてしまつ
た。八月二十九日発病、胆石。そのまえからひとの原稿

を見てたのが二、三日ひどく大儀になって机にむかう気になれず、籐とうの枕をして寝ころんだまま読んだ。それを性来嫌いな暑さのためと思い、また永い間の看護や心労、執筆につづいての読書や詩作、それらの疲労が重なったのだろうとも思っていた。それもあつたかもしれないが既に体の調子が悪くなつたのではあるまいか。二十九日の晩飯は食慾が進んでふだんよりよほど多く食べた。食後間もなく兄の碁の相手をして、暫くすると胸がつかえてきた。たべすぎのうえの碁のせいだろうと思つて消化薬をのみ書齋へあがつて長椅子に横になつてたが、過

食のためならじきらくになるはずのところ反対にだんだんひどくなる。水おちのへんがはちきれそうだ。私は皆より先に二階で床についた。そして胸をさすったり。寝返りをしたり、起きあがったり、いろいろやってみても一向かわりがない。そのうち下の人たちも寝てしまった。苦痛はますます烈しくなる。横になっても、仰向いても、椅子に腰かけても、どうにもならない。しまいには蚊帳かやのまわりを歩きまわってまぎらそうとする。そのじぶんにはただのつかえではないと気がついた。が、胃潰瘍の痛みでも、盲腸炎のでもないらしい。診察とは思っても

もう遅くもあるし、頭を悪くした姉を夜中におこして心配をさせたくない。どうかして朝までと必死にこらえる。そのうちふと胃にたまってるものを出してしまおうと考えついた。洗面所へおりていって器のなかへ吐く。血液らしいものはみえないけれど食物はほとんど消化していない。胃がからっぽになったらしいまでもどしてもちつともらくにならない。苦痛はまったく別のところからくるらしい。それからまた寢床へもどり伝てん輾てんとしてるうちに疲労の極とろとろとして目をさましたら夜が白んでいた。私はとうとうたまりかねて下へおり姉を起して近処

の先生をよんでもらった。その薬で胸の裂けそうな苦痛はよほど和やわらいだものの全体の気分はすこしもよくならない。□□先生に電話をかける。午後來てくださるといふ返事だった。床を下の次の間へうつす。病気の程度によつて看護の都合上そうする習慣になっている。

ひる過ぎ間もなく御来診。苦痛の長びいたのに比べて病名は無造作にすぐきまつた。胆石です といつて、出てしまえばなんでもない と腹部をあちらこちら ここはどうです とおさえられるのが的にあたつて痛い。苦しさにまぎれて見もしなかつたが肝臓のへんが脹はれてる

らしい。絶食、湿布ということになって先生は帰られた。姉が湿布をしてくれる。そういうことは慣れてもいるし上手だけれど病後のことで気の毒でもあり、心配でもある。××が薬をとってくるのをもどかしく待つうちにいつかとうとしたらしい。横向きになってる背中のように人の気はいがしたので首をねじむけてみたら「蟬」だった。来るはずになってたのだが知らないうちに坐ってたとみえる。

「とても苦しいんだよ」

私はめったにない弱音をはいた。その苦しさがゆうべ

からのとちがってきた。身動きするのも息をするのも苦しい。そんな風で一夜があけた。

先生のお世話で看護婦さんがきてくれた。△△さんという健康の化身みたいな人だった。看護の都合上次の間から座敷へもう一度移ることになり、そちらに別の床がのべられた。こうして私が座敷へ寝るようになったらもうおしまいなのだ。三日や五日で起きられないときに限る。三人がかりで寝てる床をひっぱり新規の床へびたりとつけた。あとは自分で転がってかわらなければならぬ。それ以外の方法では一層患部にひびきそうな気がす

る。で、私は歯をくいしばり体を廻転させてやつとこさとうつぶせの姿勢にまでなったがその拍子に思わず イタイ イタイ イタイ イタイ と悲鳴をあげた。石のつかえてるあたりだろうか、体の動きにつれてまるで体内の錆びついた歯車が無理やり逆に廻されるような痛みを感ずる。私は半廻転して床と床のあいだのへんに下をむいたまま両方に握り拳をこしらえて上体を支えている。しかしいつまでもそんな姿勢はつづけられないので、またもや悲鳴をあげながら廻転し、仰向けを通りこして右を下に止ったときはヒーヒーいって短い息をはずませ

た。吸い込むたびに痛むので息が半分しかできない。歯車の歯が折れてしまいそうだ。そのままぐたりとしてあげりかけた魚みたいに喘いでいる。

これから以下は病床日誌を参照しながら書く。朝、昼、晩と水蜜桃すいみつとうの汁をしぼって百グラム乃至百二十グラムくらい吸いのみでのむ。——葛湯くずゆの百五十グラムは味がなかった。——水蜜は本場のを貰ったのが冷蔵庫で種まで冷えている。こんよりと底澄みのしたきめの細かいその果汁はさながら崑崙こんろんの玉を溶かしたかのようにみえる。それはえならぬ薫りと舌をとろかす甘みをもちながらし

かも卑しい人肌の温みのない西王母せいおうぼの乳である。仙女の恵みの露はしんしんとして指の先までもしみわたる。

夕刻副院長さんがきて注射をしてくださる。
夜。よく眠る。

三十一日

苦痛も熱も呼吸の数もすこしへったが脈搏が九十六にふえた。野菜スープは格別の印象も残らない。林檎の汁は錆色に濁るのが難である。しかしその栄養価にふさわしい？ コクのある複雑な味がする。私が水蜜のほうば

かり望むのを△△さんはなるべく林檎にしようとする。

九月一日

朝。たいへん気分がいい。痛みも少なくなった。西瓜すいかの汁は色も安っぽく、味も水っぽくて栄養になりそうもない。元来西瓜は好きなのだけれどこうして果汁にしてみると掛け値のないところが出る。

二日

体温、脈搏、呼吸とも普通になり、食慾が非常に進ん

できた。きよ^ようの果汁は西洋梨^{なし}子。在来^なの日本の果物にはない繊細な香りである。旧^{ふる}い時代の人はこういう匂いを葉臭いとい^いって嫌いもしたであろう。幸い私は一時代遅く生れたためかかる異国の薫りをもめでたく賞美^{あやめ}することができる。それは蒼白く、ほろ甘く、いみじきたきものの香につつまれたカトリックの尼僧の恋にも譬^{たと}えようか。

三日

食慾が進んだせいもあり、ほかに所在がないのであれ

やこれやとちがった種類の果汁を考えては注文を出す。果物はお見舞いにもらうから人を煩わして買わずとも大抵家で間に合う。だからこそ気楽に注文が出せる。病床日誌によればきょうの食事は

朝　おまじり一〇〇　桃果汁八〇

九時半　ネーブル果汁六〇

十一時五十分　馬鈴薯うらごし少量　トマト汁七〇

二時半　林檎果汁一〇〇

五時　おまじり一椀　大根おろし少々　梨果汁八〇

七時四十分　葡萄果汁五〇　番茶二〇。

摘要の欄に 食欲増進あそばす。今朝はじめておまじりをめしあがってたいへんおいしそうでした とある。おまじりはほんとうにうまかった。否、うまいなぞという生やさしい言葉でいえるものではない。それは舌の感ずるただの味ではなく、その味をとおして命とつながっている。命そのものとさえいえるくらい深刻無味のうまみだ。平生から私はめったにまずさを感じたことがない。米のうまみもよく知ってるつもりだった。ところが半世紀以上も味いつづけたその米の味がこれほど貴いものだと今はじめて知った。とろとろのおまじりのぬるみ、

舌にすべるぬめっこさ、甘み、こく。一匙一匙が不老長生の靈藥の思ひである。トマトの汁はさっぱりしてるけれど鋭さがあつて果汁のような懐しみが無い。ネーブルは食べにくいことを除けば好きな果物のひとつだが果汁には色にも味にも妙にどぎついいところがあり、どこか銀座娘をれんそう聯想させる。葡萄もはじめての見参だ。琅玕ろうかんの雫かともみえる青葡萄の汁。

五日

病氣のときにはよくあることらしい。仰臥ぎようがしてじつと

天井を眺めてると松板の手のこんだ木目がいろいろな生
きものの形になってみせる。先方ではおどかすつもりだ
ろう。だがこちらもこの年になっては化けそうに功をへ
てるのだ。銀の匙の坊ちゃんとは訳がちがう。怖いどこ
ろか退屈しのぎになる。顔のま上にはぬえの胴体をとつ
たみたい猿の頭へいきなり蛇の尻尾をつけた怪物がい
る。その隣の板には眼玉ばかり大きくてそのわりに間の
ぬけた顔の魚が口をとがらしている。それとひとこまお
いてつづきの荒波のなかを分厚な唇をもったつわものが
鬚ひげを水に靡なびかせながら泳いでるのはアツシリアの彫刻に

でもありそうな図だ。そのむこうには首をのばして疾走する馬の頭、次の間との境の欄間のところには平家蟹みたいな面が二つ、平家蟹より品がなくて妖気を帯びてるのは蜘蛛の精でもあろうか。そのほか雁の横顔や、古生物の化石や。

寝つきがわるいでもなく、眠られないでもないにかかわらず寝るのがつまらなくて 夜がなければ、はやく朝になつてくれれば と念じつつ目をとじる。その待ちこがれた朝がくれば雨戸があけられ、蚊帳かやがはずされて若く輝かしい「きょう」の笑顔が私を見舞う。頭のほうは

見るのに苦しいので問題にならない。足のほう、北の二重のガラス障子を△△さんがあけてくれると写真機のシヤッターが開かれるように四角にくぎられた外景が現れ、冷たい空気が液体みたいな輪郭をもって流れこんでくる。それが衰弱と睡眠のためにけだるく弛緩しかんした神経を潑刺はつらつと生気づける。四角のなかには椎しいの木と塀外の街路樹、その枝葉のあいだからちらほらと空がみえて、時には雀の声がきこえる。ただそれしきあたらのものがこよなく美しく目ざましい。私がせいせいとして新にかえられた水に遊ぶ魚のように呼吸をしてるところへ△△さんが

洗面器に湯をもつてくる。そして幾たびも手拭をしぼつてわたす。それをうけとつて丁寧に顔や頸筋、耳のなかなどに残った夜の粘りをとったのち最後に両手を、指を一本ずつ克明にふいて手拭をかえす。と、それをさげた△△さんはかわりに朝の食事ももつてくる。

きようは蜂蜜をたべた。砂糖は配給、葡萄糖はさがしてもなし、蜂蜜はこのあいだ姉にたべさせようと思つて方々たずねたがどこにも品切れだったのであきらめてたところほかの買物にいった誰かが思いがけぬ店で見つけてきた。私は元来甘党でないにかかわらず病気のせいか

しきりに甘いものがほしい。この文字どおりの天然の甘露は砂糖とちがって胃にもたれることがなく、砂にしみる水みたいに吸収されて五体の養いとなるいみじくも貴重なものである。どういふ訳か我々日本人は従来ほとんどこれを賞美しなかつたけれど、あの横縞よこじまの仕事著をきたはね翅のある採集者たちが四角八面に飛びまわってここの山陰、かしこの野原、花園や果樹林に咲き乱れたいろいろな花からたんねんに汲みとって運びかえつたこんじきの甘露、これを甜なめて蝗いなごをたべてたとすれば古いにしえのユダヤの予言者は決して粗食だったとはいえないであろう。

慾をいえば私には紀州から到来の蜜柑の花の蜂蜜がいちばん望ましい。

六日

毎日目にみえて軽くなるとはいえ寝返りするたびに声を出すほど痛かったのがいつか忘れるようによくなつた。らくに寝返りができたらなあ　これが最初の願いだった。ようやく大願成就したのだ。きょうの病床日誌の摘要欄には　始めて患部の痛みなしに深呼吸が一回できました　とある。ちらりと見たお見舞の果物の籠に赤葡

葡萄の房のあったことをおぼえてた私が 今度は赤いほうを と注文しておいたのを、栄養に気をとられた△△さんは娘が反物をよりどるような私の好みを忘れたとみえて青葡萄の果汁がずっとつづいた。で、きょうまた赤いほうを催促した。△△さんは ああそうでございましたね。どうも…… というようなことをいって赤葡萄をしぼってきてくれた。

葡萄の美酒夜光の杯

飲まんと欲して琵琶馬上に催す

酔さいて沙場じょうに臥ふす君笑うことなかれ
古来征戦幾人か回めぐる

これは夜光の杯ならぬギヤマンの吸いのみ、魂をとろ
かす力もない搾しぼりたての果汁にすぎないけれど、その奥
ゆかしくさびた紅は千年をへだてる初唐の色である。な
つかしい微妙な薫かおりは駿馬しゅんめいなく大宛だいえんのものである。
私は夢想の神薬でもものむようにひと口ずつ口にくくみ、
舌に味わって、やがてすっかり飲みおわったときにおぼ
えず あーうまい と讚嘆の声をあげた。

七日

朝 トースト三きれ 牛乳一〇〇

事変後バタも紅茶もやめた。自然パンも牛乳もやめることになってから久しい。そこへこのトーストと牛乳だ。バタも人造バタは先生から禁ぜられたので普通のバタだ。まさに醍醐味である。先日の米の味といい、きょうのこれといい、我々が日頃自分の舌を甘やかしすぎて勿体ないくらいの天恵を忘れさせてることを思わせる。これからみれば昔荒野をさまよって飢え疲れた漂泊の民に

とっては食べられるものでさえあればなんでもマナであったであろう。

きょうから特に用便の時だけ起きあがることを許された。寝返りができてからは 起きられたら が次の念願であった。こうしてらくになると爪ののびたのが気になりだした。△△さんにとってはもらったものの普通のとりかたではとったような気がしない。私のこの爪を気にする病いは癩かんという古く曖昧ではあるが同時に多含で適切である言葉でしかいい現せない。私が仙人になれない第一の理由は雲にのれないことでもなく、霞かすみがくえな

いことでもなく、実にこの爪を長くすることが辛抱できないところにある。私は用便のあと勝手に時間を延長して爪をきりはじめた。思いきり鋏はさみの刃をくいこませてぎりぎりまではさんでしまおう。さばさばした。垢あかだらけの仙人生活から足を洗った思いだ。

十四日

午後。御来診。起床を許された。咲き残った朝顔もおしまいになり、鉢もかたづけられていた。そのためからりとした庭に苔がめずらしく青々として、秋しゅう海棠かいどうがさ

いている。睡蓮の葉が浮きながら枯れて、すっかり秋だ。はじめて温度表をみる。これは青赤黒で書きわけられた私の肉体の調子の狂った交響樂である。心臓の打樂、肺の管樂、熱は頭の琴線の絃樂げんがくか。序曲は派手に始まつてゐるがやがて頗すこぶる単調平板になり、それが「先生」という指揮者の命令によって突然中止されたのだ。が、早晚終曲の演奏はあるにしても、さしあたりこの曲が未完成に終わったのは幸さいわいなことであつた。

日本文学電子図書館

胆石

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：「中勘助随筆集」

岩波文庫、岩波書店

1985年6月17日 第1刷発行



日本文学電子図書館